

## こころの診療部

### (1)こころの診療部について

#### 概要、特色

##### (a)こころの診療部の構成

こころの診療部は子どもや家族のこころの問題に対応するために、国立成育医療センターの開設に当たって、新しく作られた部門である。開設初年度である本年度で、少しずつ形ができてきたところである。本年度のこころの診療部は、思春期心理科 生田医長、発達心理科 宮尾医長、中野医師、育児心理科 笠原医長(10月より就任)と部長 奥山の5人の医師および4人の心理士(常勤 佐藤・田辺、非常勤 白川・坂井)のチームで診療を行ってきた。

#### 診療活動

こころの診療部の診療活動の柱は外来診療、入院診療、コンサルテーション・リエゾン、である。その他、各診療科独自の集団療法やチーム医療外来がある。

##### (a)外来診療

こころの診療には時間がかかるのに対して、需要は多く、外来初診は常に2ヶ月待ちの状態になっている(緊急を要するものを除く)。図1はこころの診療部を受診した患者さんの初診時年齢である。小児期のこころ問題の受診は一般にも5-9才が多い。これはその状況を反映しているものと考えられる。29歳以降に再び山が見られるのは、親の受診によるものである。図2は各診療科の年齢別受診者数である。育児心理科は10歳未満に多く、発達心理科は5-9歳に山があり、思春期心理科は、10歳から25歳に集まっており、各科の対象の状況がよく現れている。

図1. 年齢別受診患者数(こころの診療部全体)

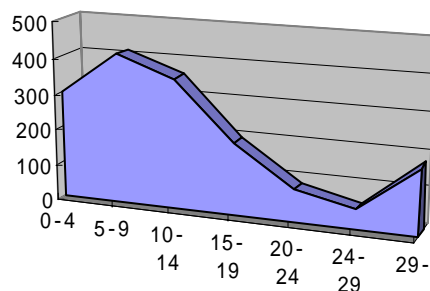
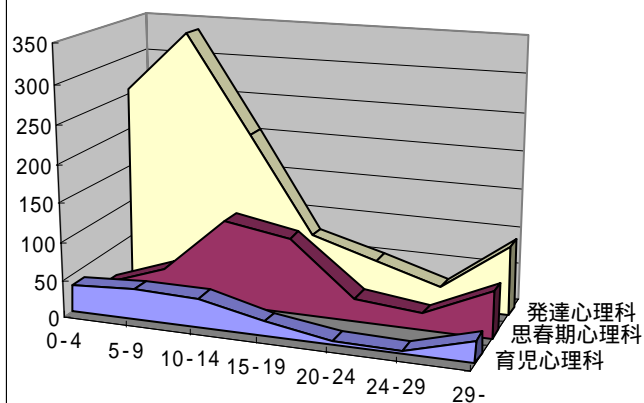


図2. 年齢別受診患者数(科別)



外来受診患者の診断名を ICD - 10 に従って分類したのが、図 3 である。F8 心理的発達の障害、F9 小児期および青年期に通常発症する行動および情緒の障害、F4 神経症性障害、ストレス関連障害、の3項目が最も多かった。

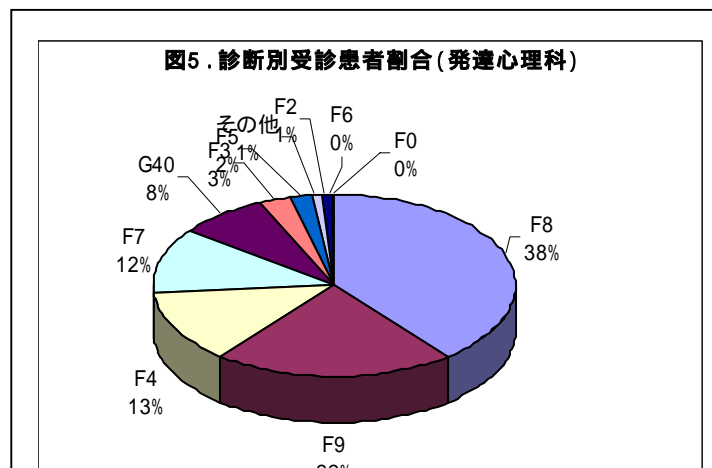
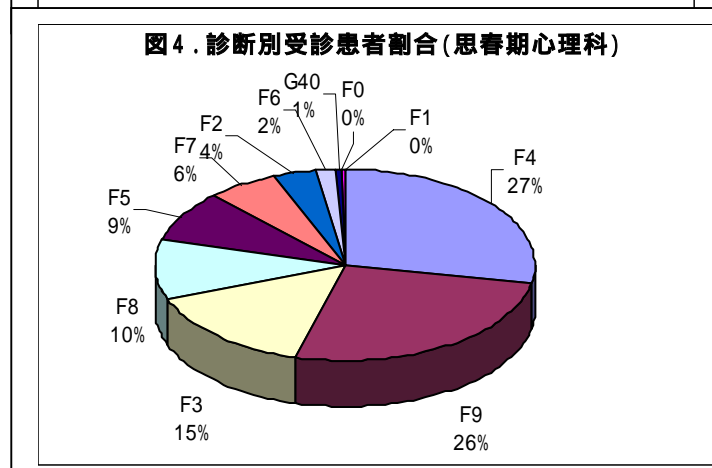
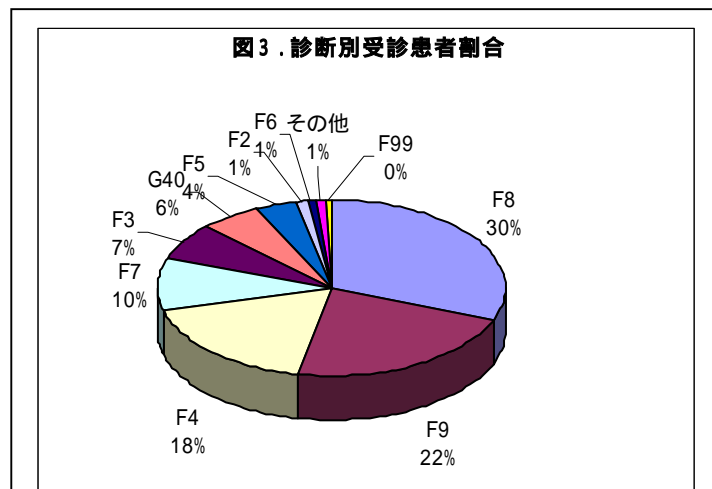
其々の科でみると、思春期心理科（図 4）は F4 神経症性障害、ストレス関連障害および身体表現性障害、が最も多く、ついで F9 小児期および青年期に通常発症する行動および情緒の障害、F3 気分障害の順となっていた。

発達心理科（図 5）は F8 心理的発達の障害が非常に多く、ついで、F9 小児期および青年期に通常発症する行動および情緒の障害となっている。これは、広汎性発達障害や多動性障害と診断される子どもの受診が多いことを反映している。

育児心理科（図 6）では、F4 神経症性障害、ストレス関連障害および身体表現性障害が最も多く、ついで、F8 心理的発達の障害、となっている。これは外傷後トラウマ障害（PTSD）や何らかのライフイベントに伴う適応障害の受診が多いことを反映している。

#### (b)入院

入院患者さんの殆どは、上記のように、総合診療部などとのチーム医療としてあたっており、主科という立場をとらなかったことから、今年度は統計を出すことはできなかった。しかし、神経性食欲不振症の患者さんが8名同時に入院している時期もあり、病棟での問題行動への対応など、さまざまな面での対応を行ってきている。



### (c) コンサルテーション

コンサルテーションに関しても、同様に、統計を取ることはできなかったが、回診では、常に20 - 30名のコンサルテーションに対応しており、増加傾向を認めている。

以下は各科の内容である。

図6. 診断別受診患者割合 (育児心理科)

